

山梨県の個体群管理

芦澤晃彦（山梨県水産技術センター）

はじめに カワウ対策は被害発生場所と被害対象（魚類捕食による水産被害なのか、排泄物による生息場所の樹木枯死などの森林被害なのか）を明確にすることが重要である。そして、被害発生場所の管理者、被害者など様々な関係者と話し合い、被害軽減のための対策を検討し、持続可能な体制で協力して作業を進めていくことが大切である。本発表では、山梨県カワウ保護管理指針に基づいて行われているカワウ個体群管理を紹介する。

モニタリング調査 山梨県では平成 14 年度から毎月 1 回 10 定点で飛来数調査を行っている。漁協組合員自らが調査することにより、「カワウを見る目」が養われている。カワウを見る目を増やし、飛来数や飛来する方向など、カワウの動向を常に把握し、その情報を共有することで、新規ねぐら・コロニーの早期発見に役立っている。新規ねぐら・コロニーが発見された際には速やかに除去を行い、県内で 1 箇所のみを抑えている。ねぐら・コロニーの箇所数を抑えることは、モニタリングや繁殖抑制を効率的に行えるだけでなく、被害範囲を減らす効果も期待できる。

放流場所での追い払い・捕獲 放流場所では漁協が主体となって、追い払い対策が行われている。カワウは同じ対策ばかり行っていると慣れてしまい、追い払い効果がなくなってしまうため、各漁協では工夫をこらしながら複数の対策を組み合わせている。また、県境では銃器による駆除が行われており、県外からの飛来を抑えている。捕獲されたカワウは解剖し、胃内容物重量組成を明らかにしている。その数値に基づき山梨県でのカワウによるアユの被害額を算出し、被害実態の把握に努めている。

繁殖抑制 繁殖抑制は、擬卵置き換えによる方法及びドライアイス処理による方法を用いて孵化しない卵を抱卵させることで、刺激しないように繁殖を抑えて、新たな加入を防ぐ対策である。山梨県では繁殖が確認された翌年（2004 年）から繁殖抑制を実施している。2016 年における、カワウが雛を育てるために食べるはずであったアユの金額は約 390 万円であり、繁殖抑制対策にかかる費用 30 万円と比較すると費用対効果は高い。ほぼ全巢で繁殖抑制が行われるようになった 2006 年以降は、巣立つ雛が最大でも 20 羽程度に抑えられている。その結果、個体数は減少傾向となっている。